

『ブツダ』における「捨身」とその作品内における意味——冒頭のエピソードをめぐって

橋本章彦

一、はじめに

仏教の開祖であるゴータマ・シッタルーダの生涯を描いた手塚治虫の『ブツダ』は、一九七二年の九月から『希望の友』に連載が始まった。その後、この雑誌は、『少年ワールド』、『コミックトム』と名前を変えていったが、その後も連載は続けられ、それが一応の終わりを見せるのは、一九八三年十二月のことであった。十年以上にもわたって書き続けられた文字通りの大作である。同時期に『ブラックジャック』、『三つ目がとおる』などの作品があり、現在ではこれらとともに手塚の代表作の一つとされている。小論は、この『ブツダ』を材料として、そこに仏教文学的な手法を援用することで新たな理解を紡ぎ出していこうと意図するものである。

手塚作品についての評論や研究は比較的多い。ただ、こと『ブツダ』については、それほど盛んに研究が行われてきたわけではないようである。内容が仏教にかかわる思想や説話と絡んでいることが、研究者や評論家の敷居を高くしているのかもしれない。

いま管見に触れたものを列挙するならば、秋山さと子「説話と方

法としての劇画——『ブツダ』について」（『ユリイカ』青土社、一九八三・二）、原草平「手塚治虫作品『ブツダ』にみられる「笑い」の効果」（『人間文化』一九、滋賀県立大学、二〇〇六・四）、二階堂黎人「僕らが愛した手塚治虫 ブツダのこと（1）」（『本の窓』三二（2）（3）、小学館、二〇〇九）、今井秀和「現代消費社会における『ブツダ』像」（『蓮花寺仏教研究所紀要』四、二〇一一）などがあり、ほかに雑誌のインタビュー記事などでブツダにふれたものを幾つか目に入れることができる。また『手塚治虫のブツダ どうしたら救われるか実践講座』（講談社、一九五五）、『手塚治虫ブツダ こころがラクになる生き方』（講談社、二〇〇二）のような人生指南的な解説書も出版されている。

ところで、よく知られているように『ブツダ』の冒頭には、台詞をおかずに画だけで構成されたきわめて印象的なエピソードがおかれています。それは、ウサギ、キツネ、クマの三匹の動物が行き倒れになった老人のために食物を運ぼうとする話で、ウサギは何もできないために自らが火の中に躍り込んでその身を捧げるといった内容を持つ。ジャータカ（釈迦の前世物語）に源を発するこの物語は、

我が国では月のウサギの起源を語るものとして、古来人口に膾炙した話であった。

ウサギのといった行為は「捨身」と呼ばれ、仏教ではもともと崇高とされる行為の一つである。それ故にこれまで「捨身餌虎」「口毘王」⁽¹⁾ などそのことを主題にした数多くの説話が語られてきた。捨身は、古来より仏教説話において極めて重要なテーマだったのである。

実は、手塚の『ブツダ』において「捨身」にかかわる話は、この冒頭のエピソードのほか二度ばかり繰り返し返される。興味深いことにそれらは、例外なくその行為を目撃した修行者に大きな精神上の転回をもたらす。シッタールダもその一人であり、彼がブツダとなることに重要な役割を担った。以下、これらを具体的に指摘しつつ、繰り返し返される「捨身」というテーマが作品全体にいかなる意義を有しているかについて考えてみたい。

一、冒頭のエピソードとその原拠

まずは、エピソードの内容を確認することからはじめよう。梗概を示す⁽²⁾。

一人の老人が風すさぶ荒れ地を杖にすがりながら進んでいる。彼は疲れているのか、ふらつき、そしてその場に倒れて動

かなくなつた。そこへ一匹のクマが近寄ってくる。続いてキツネ、ウサギもやってきて三匹は心配そうに老人を見る。動物たちは、老人への食べ物を探すために、思い思いの方向へ散っていった。クマは川で魚を捕り、キツネは土中から芋のようなものを掘り出してくる。しかし、ウサギは方々を探すが、何も見つけられない。クマとキツネは、何も持たないで帰ってきたウサギを激しく叱責した。ウサギは老人に火を焚くように伝え、自らも薪を運ぶ。そして自分を食べさせるために火の中へ躍り込んだ。驚いた老人はすぐさまウサギを助けようとするが、すでに遅くウサギは命を落としてしまう。悲しんだ老人は、死んだウサギを高く捧げ持ち、そしてウサギの魂は丸く輝きながら夜空へと昇っていった⁽³⁾。

すでに指摘があるようにこの話の源流は「ジャータカ」(釈迦の前世譚)第三一六にあり⁽⁴⁾、直接の影響関係にあるのは、おそらくは玄奘三蔵の『大唐西域記』、もしくはそれと密接な関わりのある我が国の『今昔物語集』巻五―十三「三獸行菩薩道兎焼身語」である。『今昔物語集』は『大唐西域記』を典拠しており、両者は細部についてはともかくもほぼ同じ内容を有している。これら場合、登場する獸は狐、猿、兎である。

類似の話としては、『六度集経』巻三「兎王本生」、『菩薩本生鬘論』

卷二「兎王捨身供養梵志縁起」、『菩薩本縁経』卷下「兎品」、『旧雑譬喻経』卷下、「選集百縁経』卷四「兎焼身供養仙人縁」、『雜宝蔵経』卷二「兎自焼身供養仙人縁」⁽⁵⁾など多くの典籍にみられる。ただし、登場する動物については、「ジャータカ」では狐、猿、豺、兎であり、『六度集経』や『旧雑譬喻経』では豺のかわりに獺が入っている。いずれの場合も四匹となっている。しかし、その他の多くの話では兎のみが登場し、むしろこちらのほうが主流である。『大唐西域記』や『今昔物語集』などは三匹の動物が言われているから、これらとは異なった系統の話であると考えねばならない。また、右の諸典籍ではそのほとんどの場合、最後でその兎がいまの釈尊であることが明かされ、いわゆるジャータカの形式をもって終わる⁽⁶⁾。

手塚『ブツダ』の場合、登場する動物が三匹であること、結末部分でウサギが夜空に丸く輝いて空に昇り、そのことが月を連想させることなどからみて、右に掲げた典籍経典に原拠を持つのではなく、やはり『大唐西域記』や『今昔物語集』の系統の話を念頭においていたと見てよいだろう。

二、原拠から逸脱するもの

ところで、手塚はこの冒頭のエピソードをクマ、キツネ、ウサギの三匹で構成する。しかし、この種の話でクマを登場させるものは

寡聞のためか管見に入れることができない。あるいは手塚の独創であった可能性も想定し得る。なぜならば、猿の代わりに登場したクマが、エピソード上で効果的な機能を有しているからである。

行き倒れた老人を最初に発見するのはクマであるが、手塚はそのシーンに三コマを使用する。最初の二コマでは、だんだんと近づいてくるクマの足だけが描かれ、三コマ目で少々険しい目をしたクマの顔が粹全体に描かれる。ここで、読者は、この行き倒れた老人を猛獣であるクマが襲うのではないか、というある種の緊張感を抱くだろう。そして四コマ目でキツネとクマがともに老人を見つめる画をおいた後に、はじめてそれら二匹よりもはるかに小柄で愛らしいウサギが登場させるのである。この点は、たしかに原拠となった話とは異なる。たとえば『今昔物語集』では、三匹の動物たちは、もともと一緒にいて、そこに老人が現れる展開となっている。手塚の場合、猛獣であるクマの存在は、あきらかにウサギの弱さを際立たせており、そのことが最後のシーンにおけるウサギの哀れさをより増幅させる効果をもっていると言える。これは、あるいは手塚の文芸的な手法によるものなのかもしれない。

しかしより重要なのは、このエピソードの文脈上における使われ方の違いである。これについては、作品全体の理解にかかわる看過できない問題を孕んでいる。

まず原拠の方から確認すれば、こちらの場合には、ウサギが究極の



菩薩行を実践したことにとりあえずの主題があり、さらにそれが月のウサギの起源へと収斂していくという展開を持つ。

物語の冒頭、猿、キツネ、ウサギの三匹は、畜生道を脱するため菩薩行を実践しようと約束しあう。ここで言う菩薩行とは、大乘仏教において仏になるための修行のあり方を示したもので、六波羅蜜と呼ばれる六つの修行徳目を行ずることが要求されている(7)。

実践しようとしたのである。しかしながら、か弱いが故に山野に何も探し出せなかったウサギは、自分の身を捧げるといふ究極の布施行を実践したわけである。また、その相手となる老人は、三匹の獣たちの決心を疑った帝釈天が、彼らの心根を試すために姿を変えて出現したものであった。老人は、ウサギの焼身のもととの帝釈天にもどり、その崇高な行為を長く人々に記念するために煙の中のウサギの姿を月に写す。それが月のウサギの起源だという。

すなわち、原拠になったと思われる話では、ジャータカに起源を持つが故にきわめて仏教説話的でありながらも、そちらへは結末を向かわせず、月にウサギの形が見えるその理由を説明するいわゆる伝説の形式へと物語を枠づけていく。つまり『ブッダ』冒頭話の原拠となっていたと思われる『大唐西域記』や『今昔物語集』の場合は、あくまでも月のウサギの起源を語る話なのであり、ウサギの示す究極の菩薩行はその文脈の中で意味を持つものなのであった(8)。

一方、『ブッダ』では、こうした原拠を持つテーマからはまったく切り離され、ただウサギの捨身行為だけが取り出されてあらたな文脈の中に位置づけられている。それは以下のようなものである。

開悟したが、これは捨身を目のあたりにするという経験が、修行者をして悟りへと導く契機となり得るものであることを示めている⁽¹²⁾。仏教では、心の本源的な転回によって真理に気付くことを「回心」と呼ぶが、こうした「捨身」を契機とした「回心」は、一人彼のみにとどまるものではなかった。以下、しばらくそれらについて考えてみよう。

最初に示されるのは、アシタの弟子ナーラダッタである。それは、バリアの子タッタの犠牲行為にかかわるものであった。

スードラの子チャプラは、つらい生活から抜け出すためにコーサラ国へ赴き国王ブダイの養子となっていた。チャプラの母は、息子の姿を一目見たいとタッタそしてナーラダッタとともにコーサラ国への道を進む。だが照りつける強い太陽、食料や飲料水の欠乏から、三人は道半ばでまきに行き倒れになろうとしていた。チャプラの母は、何としても我が子に会いたい一心で無理にでも先に進もうとする。その時、何かの物音がした。大蛇が卵を抱いているのであった。蛇は飢えて相当に弱っていた。タッタは、特技の同化能力によって蛇の心に入り込み、蛇に卵を数個分けてくれるように頼む。蛇は承諾したが、条件があった。三人のうち誰か一人を飲みたいというのである。タッタは、草で即席のくじを作り一番短いものを当てたものが蛇に飲まれ

ることになった。くじを引いたのはタッタであった。彼は、わざと自分が当たるように細工をしたのである。そうして彼は蛇に飲まれていく。その姿を目の当たりにしたナーラダッタは、その衝撃の中で師アシタから聞いたあのウサギの話を思い出す。そしてその時、ウサギの行為の意味に気付くのであった。人間中心に考えていたからわからなかったのだ、大自然の中ではすべてが仲間であり、仲間同士が助け合うのが生き物の掟であると。そのとき俄に蛇に矢がささった。チャプラにライバル意識を燃やす武士バンダカがあらわれて蛇を射殺したのである。そしてタッタは助けられる⁽¹³⁾。このときのバンダカの発言は、ナーラダッタの気づきとの対比で興味深い、小論の主題からは少々はずれるので今はおく。ただし、ナーラダッタは、いまだ真の悟りの域にまでは達していなかった。それは、のちに一人の子供の命を救うために何匹もの動物の命を奪ってしまいい、それによってアシタの裁きを受けることで明らかにされる⁽¹⁴⁾。その後ナーラダッタは、獣のごとき四つ足の生活を続けながら悟りへの道程を歩んでいくことになるのである。

ナーラダッタに関わる右のエピソードをゴシャラの場合と併せて考慮すれば、捨身という行為が、修行者に何らかの「回心」を導くための事件として、作品内で一定の意義を担わされていることが知

られるであろう。してみれば、物語の冒頭におかれたエピソードにおいて、ウサギの捨身を契機として開悟したゴシヤラの存在は、『ブツダ』という作品全体からみて多分に示唆的なものとなる。なぜなら、ウサギの行為のナゾを理解し得るのは、「そう何人もいるわけではなく、そのような人は神もしくは世界の王となる超能力を持つているだろう」というアシタの言葉があるからである。ゴシヤラはその一人だったわけだが、ここで言われる「神もしくは世界の王となる」人というのは明らかに後のブツダその人を指しているから、釈迦自身もまた同様の事件に遭遇し、それを乗り越えることによってブツダとなっていくであろうことを暗示的に示すものとなるのである。

四、アツサジの捨身とシツタルーダの開悟

ここで、物語におけるシツタルーダの宗教的成長を捨身というキーワードで考えてみよう。

シツタルーダがブツダとなっていく道程で主要な働きをするのは、アツサジとヤタラそしてアジャセである。アツサジは、シツタルーダの開悟への道程においてその最初の契機を与える人物であり、それは後に詳しく述べるように彼の捨身行為によってであった。ヤタラについては、苦行を捨て瞑想の最中にあったシツタルーダが、

彼への説法を通してはじめて悟りの内容を自身の内で明確にし、またそれを人類に伝える使命をも自覚することに重要な意味を持つ⁽¹⁵⁾。またアジャセは、「誰しもの中に存在する神」の発見に関わる人物で、それは苦しみの中に見せるアジャセの微笑みにふれてのとであった⁽¹⁶⁾。ヤタラとアジャセはいずれも捨身とは直接には関わっていない。しかし、両者ともにアツサジを起点とした開悟への道程の中に位置づけられるものである。この点から見てもやはり最初の出発点となったアツサジは重要である。シツタルーダは、まさに彼の捨身行為を目撃することでブツダへの歩みを進めていくのである。ここで、アツサジの物語について簡単に整理しておこう⁽¹⁷⁾。

アツサジには、『三つ目が通る』の写楽包介のキャラクターが用いられ、貧しい獵師の息子という設定である。

シツタルーダは、王城から出奔した直後、ある家に一夜の宿を借りるが、アツサジは、その家の主であった獵師夫婦のたくさんの子供たちの一人であった。シツタルーダはそこで同じく宿を借りていたナーラダッタの弟子・バラモン僧デーパと出会い、その後しばらく二人はともに旅をすることになる。そのとき獵師夫婦から押しつけられた子供それがアツサジであった。シツタルーダとデーパは、はじめはアツサジから逃がれようとする。その風体からバラモンの苦行には到底耐えられそうになかった

からである。しかし、執拗に二人の後を追うアッサジにシッタールーダは次第に彼を無視し得なくなっていく。あるとき、アッサジは雨の湿原で傷の化膿がもとで高熱を出して倒れ瀕死の状態となることがあった。シッタールーダは、デーパの制止を振り切って彼を救い出し、城壁の町パンダワで命がけの看病をする。その時、アッサジは一瞬の間臨死状態となり死の世界への入り口で神の声を聞く。それは、アッサジの寿命はあと十年であり、最後は獣に引き裂かれて死ぬというものであった。彼の父親は獵師であり、多くの生き物を殺したことの報いだという。息を吹き返したアッサジはその後予知能力が備わり、その力で多くの人々の危難を救うことになる。その後デーパと別れたシッタールーダは、やがてアッサジとともに修行するようになるが、シッタールーダにとってアッサジは、自身の死が目前に迫っているにも関わらずいっこうに動じない点でまさに尊敬すべき存在であった⁽¹⁸⁾。だがその死の日はやってきた。アッサジは、飢えたオオカミの子供たちを見てその救済のために自らの身体を捧げるのである。引き裂かれていく腕や内臓を目のたりにしたシッタールーダは、その後なかば自棄的にバラモンの激しい苦行に身を苛むようになる。しかし結局そこから得るものは何もなく、やがて彼は苦行を捨てて深い瞑想の世界へと入り真理を発見していくことになるのである。

アッサジの捨身行為を見たシッタールーダについて、物語中ではゴシャラやナーラダッタのようにそのことが彼の回心の直接の契機となったようには描かれていない。その経緯は、彼をしてバラモンの苦行を捨てさせることへ導いたという点にとどまる。しかし、歴史上の仏教は、苦行を離れたことにひとつの斬新さがあり、そこを起点として教えが成立していった。そうした原始仏教の歴史を手塚自身もよく理解していたようだ。なぜならモツガラナーナの次の言葉があるからである。すなわちアナンドがサーリプッタの案内でモツガラナーナと初めて会見たとき、まだアナンドが何も言わないうちにその人はアナンドといい、もと、おたずね者の大盗賊だったんだが、尊い人の弟子となりいま修行中だ。それから、その人は霊がついている。霊の名はアッサジという行者だ。(中略) そのアッサジという行者は十年も前自分から腹をすかせたオオカミに食べられた。あんたの師匠の尊い人は、それがもとで悟りをひらいたんだ⁽¹⁹⁾。

(句読点筆者)

モツガラナーナは、中国や日本では目犍連もしくは目連などと表記され、サーリプッタ(舍利弗)とともに釈迦十大弟子の一人とされる人物である。盆の起源を説く『仏説盂蘭盆經』などに登場するが、

地獄に堕ちた母を救い出す「目連救母伝説」はことに著名である。彼は、神通力に優れていたといい、右のモッガラナーナのキャラクター設定はそのことを踏まえたものである。「あなたの師匠の尊い人は、それがもとで悟りをひらいたんだ」という言葉は、アッサジの行為が、シッタルーダの開悟の起点になっていたことをよく表しているだろう。シッタルーダの体験は彼がブツダとなっていくまさにその重要な転換点であったと言えるのである。

アッサジへの言及は、物語のクライマックス近くで霊鷲山におけるブツダの説法でも繰り返される。この説法は、『ブツダ』という大河ドラマの中で釈迦が悟ってきた内容の集大成を示すものといっ
てよい。便宜上三コマ分の台詞をまとめて示す。

自分の不幸を自分の苦しみをなおすことだけ考えるのは心がせまいのだ。家のことみんなのことを考えてみなさい。だれでもいい。人間でもほかの生きものでもいい。相手を助けなさい。苦しんでいれば救ってやり、こまっていれば、ちからを貸してやりなさい。なぜなら人間もけだものも虫も草木も大自然という家の中の親兄弟だからです。ときには身を投げだしても相手を救ってやるがよい⁽²⁰⁾。
(句読点筆者)

三コマのうち、後の二コマにアッサジがオオカミに食べられる画

を再掲し、その次のコマから「たとえ話」としてウサギ、クマ、キツネのエピソードが、冒頭とほぼ同じ画で再び提示される⁽²¹⁾。そして最後に釈迦は次のように言う。

ウサギは自分から飢えた人にたべられてそして神になった。さていまのはたとえ話だ。むかし・・私がこどもの頃聞いた話なのです。だが、私はこのような行いをした人間をまのあたりに見たことがある。その人は生きたまま飢えたオオカミの子に自分をたべさせたのだ⁽²²⁾。

これが、アッサジのことであるのはもはや論をまたない。ウサギの捨身とアッサジの捨身はセットになるものだったのである。さきに冒頭のエピソードでゴシヤラの体験とそれを契機とした開悟は、ブツダにおける同様の体験を見通させるものと述べたが、まさにゴシヤラを見たウサギの行為は、ブツダにおいてはアッサジの捨身として経験されたわけであり、ブツダもそれを契機に開悟していったのである。つまり冒頭のエピソードは、ブツダという一人の偉大な宗教家の生成に予測的な枠組みを与えるものであり、その意味でシッタルーダの開悟への契機を予言的に提示する物語であったといえるのである。

五、おわりに

冒頭のウサギの話は、これまでその原拠がジャータカであり、かつ『大唐西域記』や『今昔物語集』にそれと同様の話があるのが指摘されてきた。小論ではこれらの話を細かく『ブッダ』の該当話と比較することで、そのテーマや内容が原拠からは相当程度にずらされ、手塚の構想する物語に沿う形で新たな文脈の中に位置づけなおされていることを明らかにした。すなわち、第一にはウサギの行為の意味を知ることができる「神になる人かもしくは世界の王になる」人であるブッダを導くための導入話として、第二には、これから始まる物語のなかで、シットルダが何を契機としてブッダとなっていくかを予測的に示す話としてである。

むしろシットルダの開悟は、捨身という行為の影響のみで実現したわけではもちろんない。ヤトラやアジャセをはじめ様々な人物や事件の総合的な結果として形成されたであろうことは容易に想像がつく。だが、捨身が重要な意義を担っていることは否めない事実であろう。

また、ウサギの捨身行為への問いは、我々にも投げかけられた課題ともなっている。手塚は、『ブッダ』をビルディングス・ロマンつまり釈迦という人物における内面的な成長を描くものとして書いて

たというから⁽²³⁾、読者は物語の展開とともに、換言すれば、シットルダの成長とともにその答えを探り出していくことにもなるのである。

ところで、修行者の回心の場面には、あのコスモゾーンが描かれる。その意味するところは、おおまかには命はすべて根本ではつながつており、おおもとは一つであるという世界観を示すものであるが、たしかにシットルダが出会う事件の中にも、また彼自身の説法の中にもこの問題は常に顔をのぞかせている。たとえば、霊鷲山での説法では次のように言う。

いつも私は言っているね。この世のあらゆる生きものはみんな深いきずなで結ばれているのだと……。人間だけでなく犬も馬も牛もトラも魚も鳥も、それから草も木も……。命のみなもとはつながっているのだ。みんな兄弟で平等だ。覚えておきなさい⁽²⁴⁾。

捨身に対する手塚の理解は、『ブッダ』という作品を通して見え隠れするこうした世界観を前提としているはずである。だが、これは仏教の思想とどのように絡んでいくのだろうか、また『火の鳥』の場合とどこが同じでどこが異なるのであろうか⁽²⁵⁾。そのことは、『ブッダ』という作品が抱える世界観への問いともなる。

また、『法華経』思想とのかかわりも注目される。最初に連載された『希望の友』、『少年ワールド』、『コミックトム』などは潮出版から出されているが、この出版社は創価学会系の会社であって、創価学会はよく知られているように『法華経』を信仰する宗教集団である。手塚は連載中に電話で編集担当者として『法華経』の思想などについて議論をしたというから⁽²⁶⁾、その影響を受けている可能性はあながちに否定できないであろう。だが詳細については別稿にゆずる。

その他、死の捉え方、仏性の問題、いわゆる六師外道の描かれ方、そして物語に挿入される仏教説話の位置づけなど様々な解決すべき疑問が湧き上がってくる。『ブッダ』という壮大な物語の理解はまだ端緒にすぎたばかりである。

注

(1) 「捨身餌虎」は、法隆寺の「玉虫厨子」に描かれていることで著名である。餓死しかけている母虎と七匹の子虎を救うために自らの身体を捧げたという話で、釈迦の前世譚つまりジャータカの一つである。また「尸毘王」の話もジャータカであった。釈迦は前世で尸毘王という慈悲のある王であった。あるとき鷹に追われた鳩がまいこんでくる。王は鳩を助けようとするが、鷹は鳩と同じ重さの王自身の肉を要求する。王は、鳩のために自身の身を切り取って与える。鷹は、王の慈悲深さを試すために帝釈天が身をかえたものであった。

(2) 本論において考察に使用したテキストは、潮出版の文庫版『ブッダ』全十二巻(一九九二―一九九三)である。ただし、掲載の画は、便宜上、同社の単行本を使用した。

(3) 『ブッダ』第一巻 一五―二三頁。

(4) 二階堂黎人「僕らが愛した手塚治虫 ブッダのこと(1)―(2)」「本の窓」三二(2)(3)、小学館、二〇〇九)。なお中村元監修『ジャータカ全集』(春秋社、二〇〇八年)参照。

(5) これらの典籍は『大正新修大藏経』巻3「本縁部上」、同じく巻4「本縁部下」におさめられている。

(6) 池上旬「今昔物語集の世界 中世のあけぼの」(筑摩書房、一九八三)に詳細な分析がある。

(7) 六波羅蜜とは布施(施しをすること)、忍辱(堪え忍ぶこと)、怒らな(いこと)、持戒(戒律を保つこと)、精進(努力すること)、禪定(精神を集中して心を安定させること)、智慧(真理を見極める)を言う。

(8) 『大唐西域記』にこの話を記した玄奘は、彼が聞いた西域地方の話を記したのであり、その地に伝わっている段階ではすでにジャータカの話形式を希薄にして、月のウサギの起源譚となっていたと思われる。

(9) 『ブッダ』第一巻八―一四頁。

(10) 『ブッダ』第一巻二四―二七頁。

(11) 『ブッダ』第二巻九五―一〇〇頁。

(12) 『撰集百因緣經』や『雜寶藏經』などの諸典籍においても兎の捨身は、修行者に相当の衝撃を与えており、そのことが悟への重要な契機となっているから、あるいはそれらからの影響も想定しておいてもよいのかもしれない。詳細については別稿にゆずる。

(13) 『ブッダ』第一卷一九三―二一九頁。

(14) 『ブッダ』第二卷一〇三―一一二頁。

(15) 『ブッダ』第六卷二三八―二四五頁。

(16) 『ブッダ』第十二卷一九〇―一九四頁。

(17) 『ブッダ』第四卷八九頁以後、十卷一六〇頁まで各話に散見されるアツ

サジの物語を梗概として整理した。

(18) アツサジは、開悟した人間のひとつのあり方を示すものとして注目しなければならない存在である。彼は外的条件によって心が散乱しない。つまりものごとくに動じないという性格を顕しており、これは仏教の理想像を彷彿とさせる。アツサジとともに修行していた頃のシッタルーダは、まだその域まで達していなかった。アツサジの死後、徐々にそのことを身につけていく。アツサジは、ことにその最後をともにしたシッタルーダの成長と対比して考える上で興味深い存在である。

(19) 『ブッダ』第十卷 一六〇頁。

(20) 『ブッダ』第十二卷 二〇一頁。

(21) 『ブッダ』第十二卷 二〇二―二〇八頁。

(22) 『ブッダ』第十二卷 二〇九頁。

(23) 『コミックトム』の一九八〇年五月号（創刊号）でのインタビュ記事による。

(24) 『ブッダ』第十二卷 一九九頁。

(25) 手塚は、前掲(23)のインタビュ記事で『火の鳥』との共通性に言及したインタビュアーに対してかなり違うと断じている。『火の鳥』が持つある種の宗教性を『ブッダ』では努めて避けたと述べている。しかし、実際にはそのようには考えられない。釈迦の伝記という性格上からみて、やはり宗教性は必然的に挿入されているように思われる。

(26) 前掲(23)。